

K.K 医師

筑波大学

医学群医学類卒

私の学生生活は大きく2つの軸によって支えられていました。医学・医療とオーケストラです。

1つ目の軸は、医学生の本分たる医学・医療の勉強でした。

大学に入って初めて出会う医学の勉強は領域の広大さ、各領域の深さともに高校までの勉強とは比べ物にならないものでした。特に、正解がまだわかっていない・正解がない命題が身近に多く転がっていることは、高校までの学習指導要領の下に整理された学習とは大きく異なり、学習にあたり大きな苦勞を伴うものでした。少し周辺知識を身に着けようとするだけで、分厚い教科書や参考書を広げて読み解く必要があることも、その苦勞を増幅させるものでした。

様々な勉強の方法を試しながら、また先輩や友人の助言を借りながら医学にかじりついた経験は、医学的知識の礎としてだけでなく、粛々と物事に取り組むという精神力の面でも、現在の私の重要なバックグラウンドとなっています。

また、4年生になり始まった臨床実習で今までの勉強との大きなギャップを感じた経験がありました。臨床の現場で使われている医学的知識は、今まで勉強してきた医学の遠くも延長線上にあり、ここにギャップはあまり感じませんでした。しかし、当時の自分が「医療を提供する医師」というよりも「医学を専門とする科学者」に近い存在であることを感じました。

特に印象に残っているのは総合診療科の実習です。健康の社会的決定要因という概念があります。患者を治すのは医療の基本だが、人々——患者のみならず——が健康を損なわないように社会環境を整えるのも医療の重要な側面であるという考えです。例えば、高齢の患者さんが誤嚥性肺炎で入院することはしばしば見受けられます。通常、治療は短期間で終了し、元の環境への早期退院を目指します。ここで肺炎を治療するのみならず、誤嚥性肺炎の再発防止として、食事形態・介助体制を検討したり、訪問歯科診療を導入したりすることが重要です。

このような良質な医療を提供するためには、医学を大前提としつつも医療制度や資源、患者さんの社会的背景など多角的な情報を取りまとめる必要があります。私が大学時代で学んでいるのは、医学を中心としたほんの一側面にすぎないことを自覚したのでした。

この考えは、実際に研修医として勤務してから、より確固たるものへととなりました。医学的な正しさ・重要性はややもすれば患者さんにとって本質でないこと、ほかの側面における評価との釣り合いこそが大事であること、これをうまく進めるためには十分な知識と医療者・患者関係者との良質なコミュニケーションが必要であることです。

多角的な物事に対するバランス感覚、周囲とのコミュニケーション能力の重要性は、学生生活2つ目の軸でも学んだことでした。

学生生活 2 つ目の軸はオーケストラでの活動です。小学生からブラスバンドや吹奏楽でのホルン演奏を趣味としていた私は、医学部とその他の学部のキャンパスが同一であることから筑波大学への進学を決意しました。入学後は管弦楽団に入り、いちホルン奏者として、また団長として活動を行いました。

音楽は駆け引きの連続です。自分の中での技量・コンディション・理想の音楽の駆け引き、周囲との楽器の音色・音楽の解釈・音楽の方向性の駆け引きが、とどまることなく続いていきます。自分の都合や理想を貫くことは「カリスマ性」と好意的に解釈できそうですが、多くの場合うまくいきません。特にアマチュアの世界では、自分や周囲の技量に限界が露呈し、未熟な演奏と成り下がってしまいます。相手の解釈を盲目的に信じ込むことも、同様により結果を生みません。

しかし、自分と周囲の状況や考えをバランスをつけながら落とし込み、それをもとに音楽を構築していくと、思いもよらない化学反応が起きます。情熱みなぎる演奏であったり、ライブ感あふれる演奏であったり、長年の信頼関係が色濃い演奏であったりと、これらはプロとは異なる、アマチュアならではの音楽を創り出せるのです。

また、オーケストラを運営し、ときに悩み、ときに喜ぶ経験は貴重な経験でありました。大学時代は管弦楽団の団長を務め、その後は Orchestra Canvas Tokyo というアマチュアオーケストラの設立・運営に携わっています。

実務的な問題を要素に切り分け、各要素について詳細を評価し、改善案や候補を策定し、そのメリット・デメリットを洗い出し、会議で提案する。当たり前の流れではありますが、これを時間がない問題や正解が存在しない問題、多くの人の利害が一致しない問題など、様々な形で経験することができました。特に多くの人に関わるとき、自分だけで考えるのではなく、友人をどう巻き込んで考えるのがよいのか、お互いに気持ちよく話をまとめるにはどうすればよいのか、苦い経験が多くありつつも、少しずつ方策を身に着けられつつあります。

バランス感覚とコミュニケーション能力。入学時は想像もつかなかった要素が、大学時代を経て自分にとって重要なパラメータとなり、今の自分の価値観を下支えしています。

医療に生涯を捧げる医師として、また音楽を愛する者として、大学時代に手に入れた価値観を大事にしていきます。